



吉川英梨

2

小説で特救隊へリ「墜落させちゃったよー」

刑事たちと海技職員、そして警備艇の活躍を描いたアクション警察小説シリーズです。第4作となる『海底の道化師』を夏に上梓したところでした。他シリーズの執筆や新たな依頼で、新東京水上警察は5作目の執筆の目途が2年後という状況、しばし海からは離れるつもりでした。

メールを転送してきた担当エージェンツさんは、差出人の海上保安協会なる組織を知りません。私もまた然り。「吉川さんの方がお詳しいかも」「今後の新東京水上警察執筆での取材のいいコネクションにはなりそう」「海上保安友の会理事はリスキーでは」等々、エージェンツさんの率直すぎる文面は、いま読み返すと苦笑してしまいます。それくらい、私もエージェンツさんも、海上保安協会のことを知らなかったのです。

これまで4作が発表された
新東京水上警察シリーズ



私はそのころ、警察官友の会に入りたくて、関係者に探りを入っていたところでした。まさかの「海の警察官」から、友の会入りどころか、理事にならな

いかというお誘いのメールらしいと察し、「不思議な縁があるものだな」と転送メールを開きました。

差出人は、宮野直昭氏。

さてどこかで見覚えのある名前——と思いつつ読み進め、トータル2度、飛び上がりました。

まず「元羽田特殊救難隊長」という宮野氏の肩書。

『『海底の道化師』で、特殊救難隊のへりを墜落させちゃったよー！』

冷や汗です。これは絶対、お叱りのメールに違いないと思ったのです。

一体どんな人なのか、ネットでお名前を検索してみたところ、元第三管区海上保安本部長……。

「超えらい人じゃーん!!」

私は書棚へ走り、成山堂の『海上保安庁特殊救難隊』の本を引っ張り出しました。宮野氏が編纂に携わったものだとメールに記してあったのです。私にとっては『海底の道化師』を書き上げる際に参考にさせていただいた大切な一冊。そこにメールの差出人と同じ名前を見つけて、妙に感動したのを覚えています。

作家として、参考文献を書いた方からのリアクションは嬉しいものです。しかもどこにもお叱りなどなく、「海上保安友の会の理事をお願いしたい」という大変名誉な依頼メールでした。

私はすぐさまエージェンツをすっ飛ばして、宮野氏にメールを返信しました。こうして宮野氏と運命(!?)の出会いと『海蝶』への道が開けることになりました。(つづく)

突然のメールに冷や汗「お叱りかも」

『海蝶』は2年前の秋、一通のメールから始まりました。

世間は築地市場の移転があったころ、私自身は長男が小学校に上がった年で、日々てんてこまい。仕事上では、4本の警察小説シリーズを抱え、新たなチャレンジ（後に発売される『雨に消えた向日葵』『ブラッド・ロンダリング』）の取材や執筆に明け暮れていました。

メールは、所属するアップルシード・エージェンシーの担当さんから。転送メールを表すFWマークのあと、「新東京水上警察を読んで」とありました。

新東京水上警察は、警視庁管内の東京湾を舞台に、所轄署の